

イブカシ・イブカルの語誌

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 光浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1407

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



イブカシ・イブカルの語誌

吉 田 光 浩

はじめに

つとめて文あり「夜更けにければ心地いとなましくてなん。いかにぞ。…中略…」などぞあめる。なにかは、かばかりぞかしと思ひ離るるものから物忌みはてん日、ゆふかしき心地ぞそひておぼゆるに、

(かげろふ日記 中 天禄二年六月)

ここは、鳴滝参籠から強引に連れ戻された直後の筆者(道綱母)が、夫(兼家)から文を受け取り、その折の心の動きが示された部分である。意地を張り通したため危うく尼にならなければならぬところであった筆者は、この後「雨蛙」の異名を得ることになる。日記中のエピソードとして一つの盛り上がりを見せる場面であるが、ここには、特殊な語形の形容詞ユフカシキが筆者の心情を表す語として用いられている。

この箇所については、古本系の最善本とされる宮内庁書陵部蔵本をはじめ、現存する主だった諸本には異同がなく、いずれも「ゆふかしき」と記されている。しかしながら、現行の諸注釈では、イブカシキに改められる場合が多いようであ

る。

本稿においては、ここに現れたユフカシを含めて、イブカシとまたその動詞形イブカルについて、その語形と語義の問題について、検討を試みておくことにする。

一 イブカシ・イブカルの上代語形について

イブカシ・イブカルについて、現行の国語辞典・古語辞典の記述内容を詳細に検討すると、幾つかの対立する点が見られるようである。例えば、『小学館古語大辞典（昭和五八年・第一版）』（以下、『小学館古語』）では、イブカシ・イブカルのイブについて、「いぶせし」の項に、「いぶかし』『いぶかる』と（イブセシは…筆者注）同根。『いぶ』は不分明で晴れないさま」と記述されているが、一方、『角川古語大辞典（昭和五七年・初版）』（以下、『角川古語』）では、同じく「いぶせし」の項に、次のように記述されており、イブカシ・イブカルとイブセシとの同根関係は否定されている。

（イブセシは…筆者注）「いぶかし」「いぶかる」と結びつけて考えるのが普通であるが、これらはもと、「フ」が清音であるから、元来は無関係であろう。

イブカシ・イブカルとイブセシの同根説を明らかに「無関係」として否定する辞書は、『角川古語』に限られるようであるが、「上代ではイブカシの第二音節が清音」とする記述の見える辞書は多く、『日本国語大辞典（昭和四八年・第一版）』（以下、『日国』）・『岩波古語辞典（平成二年・補訂版）』（以下、『岩波古語』）・『時代別国語大辞典上代編（昭和四二年版）』（以下、『上代編』）などの他に、先に挙げた『小学館古語』でも「イブカシ」の項においてはその記述が見える。したがって、おおむね現行の辞書には、イブカシ・イブカルの第二音節は、上代には清音であったとする見方を支持する記述が見出される。しかしながら、『上代語辞典（昭和四二年版）』では、第二音節が濁音のイブカシ・イブカルを見出し語として採用

しており、その記述部分にも第二音節に濁点が付されていることを考えると、この問題について、なお、ここで確認しておく必要はあるものと思われる。

清濁の問題について、検討の対象とすべき用例は、かなり限られてくることになるが、『万葉集』には、次のように、仮名表記によるイフカシ・イフカルの例がいくつも見出される。

相見ずて日長くなりぬこのころはいかに好去くやイフカシ(言借) 吾妹(卷第四 六四八)

眉根搔き下イフカシ(言借見) 思へるに古人を相見つるかも(卷第十一 二六一四)

筑波嶺を清に照らしてイフカリシ(言借石) 国のまほらを……(卷第九 一七五三)

ここに見られるように一字二音の仮名で「言借」と表記される例が三例見られるが、この他に、この卷第十一の歌には「一書歌日」とあり、一字一音仮名でイフカシが示されている。

眉根搔き下イフカシ(伊布可之美) 思へりし妹が姿を今日見つるかも(卷第十一 二六一四)

同様に一字一音仮名のイフカシの例は、もう一例見出される。

相見まく欲りすればこそ君よりもわれそまさりてイフカシ(伊布可思美) すれ(卷第十二 三二〇六)

このように、第二音節については、いずれも清音の仮名「言(イフ)」「布(フ)」が用いられており濁音仮名の例は見当たらない。

『上代語辞典』では、ここに挙げた『万葉集』の他に『日本書紀』の次の例を引いているが、仮名表記の例ではなく、ここに見られる「未審」が厳密にイフカシではなくイブカシと読まれたかどうかは疑問である。

臣等以今年正月ヲ到コト、如此カクイヘトモ 未審 而未審、来不也(日本書紀 卷十九 欽明天皇十五年甲戌)

また、『万葉集』の注釈史上において「在千瀉あり慰めて行かめども家なる妹い鬱悒せむ」(万葉集 卷第十二 三二六)に見られる「鬱悒」(注)についても、イブカシの訓を宛てる読み方も行われて来たが、「鬱悒」はオホホシ(オホボシ)

あるいはイブセシの訓が宛てられる場合もあり、上記の場合と同様の理由で、これをイブカシの確例とすることは難しい。このような点から第二音節に濁音仮名を用いた例が見出されない限り、『角川古語』の記述に見られるように、イブセシのイブとイブカシ・イブカルのイブとは、ひとまず、その関係を否定してよいものと考ええる。したがって、イブカシ・イブカルの第二音節は、多くの辞書が認めるように清音フであり、上代はイブカシ・イブカルの語形であつたことが穩当であろう。

二 イブカシ・イブカルの異形態について

イブカシ・イブカルを巡る語形上の問題として、次に検討しておくべき事柄は、冒頭に掲げた『かげろふ日記』のユフカシキの例である（冒頭例参照）。この箇所については、先に述べたように現存する主だつた諸本には異同がなく、いずれも「ゆふかしき」と記されている。また、その扱いについては、近代以降の諸注釈において、「底本『ゆふ』は誤」（『全講蜻蛉日記』三〇〇頁）とする立場と「底本『ゆふかしき』は誤写でなく、誤読による仮名違いであろう」（『蜻蛉日記全注釈』四七九頁）とする立場が見られ、いずれの立場にせよ語頭がユと表記されたのは、何らかの誤りがあつたものとして捉えられているようである。しかしながら、この例以外にも、同様にユフカシあるいはユフカルの例が他の資料に見出される場合には、単なる誤りとして処理されるべきではなく、別の現象の萌芽として捉える必要が生じてくることになる。

その一例として、時代は降るが鎌倉期の加点と推定される訓点資料では、次のように動詞形ユフカルが見出される。

翠煙ニ夕籠メテ 訝ユフカルニ 鑪ニ香於不レ止メ

（金沢文庫本『本朝文粹』巻第一・織女石賦）

このように、動詞形イブカルが現れるべきところにユフカルが現れるところをみると、『かげろふ日記』に見られるユフカシの語形を、単なる誤りとして処理することは適當ではない。すなわち、何らかの音韻上の変化が表記の上に現れたもの

と考えるべきであろう。その理由は、おそらくイとユの音の近似性によるものであると考えられるが、ユフ（ブ）カル・ユフ（ブ）カシの語形は、その後の文学関係の資料には見出すことができず、『色葉字類抄』『類聚名義抄』、さらに『日葡辞書』にも採録されていない。

しかしながら、中世の節用集を中心とする古辞書には、その語形の痕跡をたどることができるようである。

例えば、明応五年本『節用集』には、濁点を付した動詞形「^{ユブカル}誦」が見出される。この他に、凶書寮零本『節用集』にも同様の記述が見られ、黒本本『節用集』には、形容詞形「^{ユブカシ}誦」と読める例が認められる。ただし、他の多くの節用集では、「誦」字に対して、主に動詞形イブカルの傍訓を、また、「不審」あるいは「未審」に対して形容詞形イブカシの傍訓が用いられる傾向があるため、シはルの誤写という可能性も考えられるのであるが、易林本では「^{イブカシ}誦」と形容詞形が記されており、やはり形容詞形も「誦」の傍訓としてまれに用いられたものと考えられる。また、弘治二年本『節用集』には、イの項に「^{イブカル}誦」、ユの項には「^{ユブカル}誦」がそれぞれ記されており、ユブカルあるいはユブカシという語形は、誤写や誤読ではなく、確かに存在したものと考えられる。

この他にも、一六世紀中頃に成立した明の鄭舜功による日本紹介の書『日本一鑑』の「窮河話海」巻之五「寄語」に「誦右付佳路」とあり、当時ユブカルが用いられたことを裏付けている。

ただし、節用集の傍訓としての採用状況を見ると動詞形では「誦」にユブカルが比較的多く見出せるものの、やはり形容詞形についてはユブカシよりもイブカシが圧倒的に優勢であり、ユブカシ・ユブカルは、標準的な語形としては用いられなかったものようである。このような使用状況を総合して考えるとユブカシ・ユブカルは、イブカシ・イブカルの「ゆれ」として、少なくとも中古から中世にかけて現れた語形であったものと思われる。

三 第二音節濁音化の時期について

先に確認したように、イブカシ・イブカルの上代語形は、イフカシ・イフカルであった。したがって、その第二音節は、中古以降のいずれかの時期に濁音化したことになる。その過程を跡づけるものとして注目されるのが、辞書の記述である。例えば、観智院本『類聚名義抄』には「呀」に濁声点の付された形容詞形イブカシ、また、「訝」には同じく濁声点のある動詞形イブカルと形容詞形イブカシ、「訝」には濁声点のないイブカル、「不審」「未審」にイフカシ、などの記述が見られ、動詞形・形容詞形いずれについても濁声点の付くものと付かないものが示されている。なお、『小学館古語』のイブカシの項には、「類聚名義抄では、フに濁声点が付されており、中古末期に『いぶかし』であったことは『いぶかる』の場合と同様である」と記述されているが、上記のように観智院本『類聚名義抄』には、動詞形・形容詞形いずれについても濁声点のあるものとないものが示されており、濁音化の完了時期については、そこから知ることはできない。しかしながら、これらは、中古に第二音節が濁音の語形と清音の語形があり得たことの傍証になるものと考えられる。

一方、時代は降るが、節用集には『伊京集』および饅頭屋本『節用集』に「未審」、文明本『節用集』に「未審 又不審」(イブカツシは誤写か…筆者注)・「訝」^{イブカル}と記されており、節用集の原本には濁音語形が記載されていたことを予想させる。また、『日葡辞書』には *Ibucaxij*・*Ibucaxisa*・*Ibucaxu* の記述が見られ、遅くとも中世の中頃あるいは末には、現代語と同様、濁音語形のみとなっていたものと考えられる。

このように、以上の辞書の記述から、イフカシ・イブカル^{イブカシ}の第二音節濁音化の時期については中古から中世にかけて完了したというおおまかな様子を知ることができる。

しかしながら、イフカシからイブカシへの濁音化の完了する時期については、語中のハ行音に関する問題でもあるため、

もう一つの手がかりとして、ハ行転呼が一般化する時期との関係についても考慮する必要があるものと考えられる。ハ行転呼に関しては、既に奈良時代からその兆候が観察されるものとして指摘されており、平安時代に広い範囲に及んだものと考えられる。

仮にイフカシの第二音節フの濁音化がハ行転呼の影響が及ぶ時期よりも遅かったとすると、イフカシはイウカシあるいはユーカシに近い音として発音されることとなり、その音に該当する表記が資料中に見出される可能性があったことになる。そこで先に掲げた『かげろふ日記』のユフカシキを、そのようなハ行転呼の影響を受けたイフカシであるとする見方も成り立ちそうであるが、そうであるとすれば、現代語イブカシ・イブカルの語形は、イフカシからユーカシを経て成立したというきわめて不合理な経過をたどったことになる。また、中世以降の資料に語頭がユで第二音節に濁音表記のあるユブカル・ユブカシの記述が見られることについても説明がつかなくなる。したがって、イブカル・イブカシの第二音節フの濁音化は、ハ行転呼の影響が及ぶ前に完了しており、その洗礼を受けなかったとする方が自然である。

そのハ行転呼の一般化の時期は、明らかではないが、およそ中古の末期にはかなり広い語に及んでいたのではないかと考えられる。これを基準として、強いてイフカシがイブカシへと濁音化を完了した時期を求めると、その時期は、遅くとも中古の末期に至るより前であったものと推定される。

このことから、『かげろふ日記』のユフカシキは、第二音節濁音化には直接関係なく、先に述べたように、語頭イとユの近似性から生じた「ゆれ」であったものと考えられる。したがって、この作品の成立時に第二音節は濁音化されていたか否かについては、現段階では不明としか言いようがない。一方、鎌倉期に加点された金澤文庫本『本朝文粹』の「訝」^{ユフカル}については、既にその時期に第二音節の濁音化は完了していたものの、濁音符が表記されなかった例であると考えられる。

また、それ以降の資料である節用集の諸本に第二音節に濁音符のある「訝」^{ユブカル}「訝」^{ユブカシ}の記述が認められることの説明も可能となる。

以上のイブカシ・イブカルについて、語形に関する問題をまとめると、すでに多くの現行辞書において認められているように、上代は清音語形イフカシ・イブカルであったものと考えられる。また、中古では、第二音節の濁音化が始まったが、ハ行転呼の影響が及ぶ前（遅くとも中古末期に入る前と思われる）には濁音化を完了してイブカシ・イブカルの語形になっていたものと推定される。一方、中古中期には、イフ（フ）カシ・イフ（フ）カルのゆれとして生じた語形ユフ（フ）カシ・ユフ（フ）カルが用いられており、それは標準的な語形としてのイブカシ・イブカルの地位を脅かすことなく後代に至るまで用いられたものと考えられる。

四 イブカシ・イブカルの語義について

ここでは、イブカシ・イブカルを巡る語義に関する二、三の問題について考察しておくことにする。

語義の面からイブカシ・イブカルについて検討すると、そこには現行辞書の記述に異なりが認められるようである。例えば、形容詞形イブカシについて、『日国』では、「物事の不明で、はっきりしない状態を、明らかにしたいという気持ちを表す」（イブカシイの項目）と記述され、次の二つの意味区分が設けられている。

①物事が不明で気がかりだ。不明な点について知りたい。見たい。聞きたい。

②疑わしい。よくわからない。不審に思われる。

また、『角川古語』では、「不明・不審のものに対する疑いの感情を表す。そしてさらにそれを明らかにしたい、知りたい、意にもなる」とされ、『日国』とは順序が逆になるが、同様に「不明だ。不審だ。気がかりだ」とする意と「おぼつかなくゆかしい。わからないことに対して明らかにしたく思う心さま。知りたい。気が引かれる」意との二つの意味区分が設けられている。『日国』『角川古語』いずれも物事の不明であるという状態表現を軸に、それを明らかにしたいという心情

を表す語として捉えられている。また、『岩波古語』では五つの意味区分が設けられているが、『日国』『角川古語』に挙げられている語義が、おのおの細分化された形で示されており、内容的にはそれらに一致していると考えて良い。

しかしながら、『小学館古語』には、これらの語義の他に情意表現である「心が晴れない。胸がふさがる」意が示されており、注意が必要である。『小学館古語』では、この語義の用例として、『かげろふ日記』の一例を引いている（冒頭例参照）。冒頭例の場面は、先に述べたように、鳴滝参籠から連れ戻された直後の、筆者の夫に対する心の動きが示された部分である。したがって、ここに用いられたユフカシが筆者の心楽しまない心情を表すものとして解釈できそうにも見えるが、直前に「なにかは、かばかりぞかしと思ひ離るるものから」とある。このことから考えると、ユフカシの意味するところは「思ひ離るる」心情と交錯し、対立する内容でなければならぬ。したがって、この部分は「それでもやはり（訪れてくれるのではないか）」とする期待を意味するものとして捉える方が適切である。すなわち、ここに用いられたユフカシは、「来てくれるのではないかと」気がかりに思う心情」を表すものと思われる。ということであれば、この用例は「心が晴れない。胸がふさがる」意を示すものではないということになる。

『小学館古語』の「心が晴れない。胸がふさがる」意には、この用例が挙げられているのみであるが、この語義が意味区分として設けられた、その背景には、先にも挙げた『万葉集』の「在千瀉あり慰めて行かめども家なる妹い鬱悒せむ」（巻第十二 三二六二）などに見られる「鬱悒」にイブカシの訓を宛てて読まれることもあったという注釈史上の経緯にも関係しているものと考えられる。しかしながら、先にも述べたように「鬱悒」については、現行の諸注釈書においてオホホシ（オボボシ）あるいはイブセシの訓が宛てられる場合が多く見られ、これをイブカシの確例とすることは難しい。『小学館古語』においてもこの点を考慮して、『かげろふ日記』の例を用いたものと推測されるのであるが、この例も上記の通り、この意味区分の例としては適当ではない。また、この他にもこの語義に該当する例は管見の限り見当たらない。したがって、現段階において、「心が晴れない。胸がふさがる」意は、イブカシの語義として認められないものと考ええる。

一方、動詞形イフカルには、いずれの辞書にも形容詞形の語義に対応する「様子不明であるので知りたいと思う」意が示されているが、それ以外に、「いきどおる・怒り狂う」意を示す辞書とその語義に関する記述の見られない辞書がある。仮にこの語義が動詞形イフカルに認められるとすると、形容詞形イフカシにも同様に強い情意を示す語義が含まれる可能性が考えられる。そのため、この問題についても、同様に検討しておく必要がある。

この語義に関する記述が見られる辞書には、『上代編』『日国』『小学館古語』を挙げることができるが、一方、『上代語辞典』『岩波古語』『角川古語』には、この語義に関する記述は見られず、ここにも現行の辞書の記述に「対立」と思われる相違を見ることが出来る。

前者三種（『上代編』『日国』『小学館古語』）の辞書は、いずれもその用例として神道五部書の一つである『倭姫命世記』の次の例を引いており、これ以外の用例は記されていない。

神倭日本磐余彦天皇御宇、悪神伊不迦理豆、人民亡、火氣発起而、天下安_レ不。

『上代編』では、この語義について、「考」の項目に「おそらく息吹くの再活用であろう。この方が原義に近いか」と記され、同様の記述は『小学館古語』にも見出される。しかしながら、『倭姫命世記』は、古代に仮託して鎌倉中期に撰作された資料であることが知られており、古代語の資料としてみることはできないものと考えられる。また、この用例の直前には続群書類従本・新訂増補国史大系本のいずれにおいても「一書日」の記述があり、この用例が先行する資料の引用部分であることが示されている。したがって、この資料が撰作された鎌倉期の言語資料としてみることも不可能である。ただし、そこになぜ「イフカル」が用いられたのか、という疑問は残されることになり、なお検討の余地は残るのであるが、管見の限りでは、この例以外にこの語義に直接つながる動詞イフカルのもの、見当たらず、また、形容詞形イフカシについてもこの語義に関係する例は、見当たらないようである。このことから、いずれの場合にしても、「いきどおる・怒り狂う」意をこの用例のみから認めることはできないものと考えられる。したがって、これ以外に、適切な用例が現れない

限り、現段階においては、動詞形イフカルに強い情意を表す「いきどおる・怒り狂う」意を認めることは難しい。

おわりに

以上、イブカシ・イブカルを巡る諸問題について、語形および語義の面から考察を加えてみた。そこから、イブカシ・イブカルは、上代には第二音節が清音のイフカシ・イフカルであったが、①ハ行転呼が一般化する前に濁音化を完了したものと考えられること、②ユフ(ブ)カシ・ユフ(ブ)カルの語形がイフ(ブ)カシ・イフ(ブ)カルの「ゆれ」として用いられたことについて考察を加えた。また、語義の面については、③イフカシには「心が晴れない。胸がふさがる」意、イフカルには「いきどおる・怒り狂う」意を認める辞書が見られるが、いずれもそれらの記述には問題があり、認められないこと、などについて述べてきた。

結果的に、語史ならぬ語誌として御批評を問う次第である。

注1 例えば、日本古典文学大系本『万葉集』では、この巻第十二・三六六一歌の「鬱悒」にオボボシミの訓を宛てている。

注2 金澤文庫本『本朝文粹』では、この他に二箇所「訝」字が用いられているが、その傍訓は「イフカシ」「イフカル」となっており、語頭がユの語形とイの語形が同一資料中に混用されている状態を窺うことができる。

*本稿執筆にあたり、神奈川県立金澤文庫の職員の方々には、資料調査の面でご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

(主要参考文献)

- 高木市之助・五味智英・大野晋編『日本古典文学大系万葉集』昭和三一・岩波書店
喜多義勇『全講蜻蛉日記』昭和三六年・至文堂
中田祝夫編『色葉字類抄研究並びに総合索引』昭和三九・風間書房
柿本 奨『蜻蛉日記全注釈』昭和四一年・角川書店
国史大系編修会編『新訂増補国史大系日本書紀(前編・後編)』昭和四一―四二・吉川弘文館
中田祝夫編『古本節用集六種研究並びに総合索引』昭和四三・風間書房
中田祝夫編『文明本節用集研究並びに索引』昭和四五・風間書房
正宗敦夫校訂『類聚名義抄』昭和四五年・風間書房
中田祝夫編『中世古辞書四種研究並びに総合索引』昭和四六・風間書房
大友信一・木村農編『日本一鑑本文と索引』昭和四九年・笠間書院
中田祝夫編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』昭和五五年・勉誠社
土井忠生編『邦訳日葡辞書』昭和五五年・岩波書店
佐伯梅友・伊牟田経久編『かげろふ日記総合索引』昭和五六・風間書房